第129回　日文研フォーラム

■

五・七・五、日本と韓国

The “5・7・5”, Meter in Japan and Korea

■

金　貞　禮
KIM Jeong Rye

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター
所長　山折　哲雄

● テーマ ●

五・七・五、日本と韓国

The "5・7・5", Meter in Japan and Korea

● 発表者 ●

金　貞　禮
KIM Jeong Rye
国立全南大学校　副教授
Associate Professor, Chonnan National University, Korea
国際日本文化研究センター　客員助教授
Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

2000年5月9日（火）

発表者紹介

金　貞　禮
KIM Jeong Rye
国立全南大学校副教授
Associate Professor, Chonnan National University, Korea
国際日本文化研究センター客員助教授
Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

1985年２月	韓国・全南大学校日語日文学科卒業
1988年３月	東北大学大学院文学研究科修士課程終了
1991年３月	東北大学大学院文学研究科博士課程終了
1991年８月	韓国・全南大学校日語日文学科 専任講師
1994年４月	韓国・全南大学校日語日文学科 助教授
1998年４月～現在	韓国・全南大学校日語日文学科 副教授
1999年８月～2000年７月	国際日本文化研究センター 客員助教授

主な著書・論文

・「芭蕉俳諧における『さび』の考察―「さびし」の句を中心として」『日本文芸論叢』７号、1989年10月
・「芭蕉俳諧における時間意識の様相」『龍鳳論叢』24号、1994年12月
・「日本文学の韓国語訳における問題点－仮名と固有名詞の表記を中心に」『日本語文学』創刊号、1999年12月
・「俳句文芸における曖昧性についての考察－松尾芭蕉の発句を中心に」『日本語文学』２号、1996年12月
・「俳句の世界」『シワ サラム』秋号、1997年８月
・「『おくのほそ道』の韓国語訳をめぐる諸問題－訳者の立場から」『連歌俳諧研究』96号、1999年２月
・『芭蕉の俳句紀行Ⅰ―おくのほそ道』バダ出版社、1998年２月
・『光州民衆抗争』（共訳：日本語訳）光州市5・18資料編纂委員会、1999年５月
・『日本を強くした文化コード16』（共著）ナムワスプ、2000年１月
・『論争で見た日本思想史』（共訳）成均館大学出版部、2001年６月

一　はじめに

「五・七・五、日本と韓国」。ここで「五・七・五」というのは、ご存じのように俳句の音数律のことですが、どうしてこのようなテーマにしたのか、そのきっかけは二つあります。一つは、俵万智の『サラダ記念日』（一九八七）がベストセラーになった時の驚きからです。この本は二百万部も売れたそうです。特に当時の日本の若者に非常にうけがよかった。この本はご承知のように短歌集ですね。分かりやすい話言葉で、この時代の若者の微妙な恋心のあらゆる面を端的に表わしている恋の短歌集。というのがベストセラーになった要因の一つだろうと言われています。が、それまで日本の若者は、五・七・五の俳句や、五・七・五・七・七の短歌の世界にうんざりしていたのではなかったのか。たとえば、それが恋の現代詩であってもベストセラーになっただろうか。日本の定型詩の力についてのおどろき。それが最初のきっかけです。

もう一つは、おととし（一九九八年）、わたしは『おくのほそ道』の韓国語訳（バダ出版社、ソウル）を出版したのですが、当時、俳句が韓国の読者に享受される中で現われる様々な意外性、その驚きからです。というのは、『おくのほそ道』には全部で六十二句の俳句が入っているのですが、韓国語で五・七・五に訳せたのは、そのうちの一〇

句だけでした。これには日本語と韓国語の音節の違いなど、いろいろな事情がありました。五・七・五でない俳句がどう受け止められるか。日本語の俳句に親しんでいて、それまで主に俳句についての研究をつづけてきた私としては、たとえそれが韓国語であるにしても、その音数律が五・七・五でないと、崩れた形の彫刻を見るときのような、とても俳句とは思えない、なにか俳句に、特に芭蕉に、非常に悪いことをしてしまったような気がしていたのでした。それで、わたしは自分のゼミの学生に、韓国語訳の『おくのほそ道』の中でいちばんいいと思う俳句を五つ選んで、その理由とともにその俳句についての鑑賞をレポートとして書かせました。そうしたら、その一位を占めたのが、なんと芭蕉の俳句ではなく、『おくのほそ道』の旅に同行した曾良の俳句、「行〳〵てたふれ伏すとも萩の原」という作品でした。この句がよまれた部分を『おくのほそ道』の中で見てみましょう。

曾良は腹を病て、伊勢の国、長島と云所にゆかりあれば、先立て行に、

行〳〵てたふれ伏とも萩の原　　曾良

と書置たり。行ものゝ悲しみ、残ものゝうらみ、隻凫のわかれて雲にまよふがごとし。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露　　『おくのほそ道』

この旅の最初から芭蕉に同伴して旅を続けていた曾良は、途中の山中でお腹をこわして、この句を残して芭蕉に別れて行きます。曾良は、「わたしは先生に別れて一足先に立っていきます。行き〳〵てたおれ死ぬかも知れません。だけどどうせ死ぬのでしたら、萩の花が咲き乱れる野原で死にたいものです」といっています。この句は表面的に解すればこのようになるでしょう。「たふれ伏(ふす)」という「死」を思わせることばと「萩」の花の可憐なイメージが重なっていて、悲壮できれいな句ですね。これに対して、残された芭蕉は、「行もの、悲しみ、残もの、うらみ、隻凫(せきふ)のわかれて雲にまよふがごとし」と、この別れに際しての悲しみを述べてから、「今日よりや書付消さん笠の露」の句で答えています。別れにともなう寂しさと悲しみ。これは時代と国を超えて伝わるものなんだなと、わたしは、当時学生のレポートを読みながらしみじみと思ったものです。

次に人気のあった俳句は、「閑(しづか)さや岩にしみ入(いる)蝉の声」。第三位は、「夏草(なつくさ)や兵(つはもの)どもが夢の跡」。たまたま一位と三位の句は韓国語でも五・七・五でした。が、「閑さや」の句は、韓国語では五・七・六になっていました。しかし、韓国語に訳された俳句が、五・七・五の音数律にあわないことを気にする学生は一人もいなかった。このようなことは、実はわたしのゼミの学生だけでなく、わたしの本を読んで感想を話してくれたわたしの同僚、あるいはファン・レターを送ってくれた数人の読者も同じで、彼らの感想はこの

短い詩への驚きと感動が主だったのです。

わたしは、『おくのほそ道』の韓国語訳にあたって、あらかじめ長い訳者序文の欄を設けて、俳句というのは、五・七・五の音数律による定型詩であることを詳しく説明しました。にもかかわらず、どうして韓国の読者は五・七・五の音数律を気にしないのか。俳句の一番の特徴である五・七・五の音数律がなくても、それが詩として成り立ち、読者にも伝わるというのはどういうことだろうか。という疑問がもう一つのきっかけだったのです。

芭蕉の時代やそれ以前にも字余りの俳句が作られていたし、近代になっては日本でも自由律の俳句などが試みられたりしましたが、どの時代でもその中心は、五・七・五の定型の俳句でした。この複雑な時代に、五・七・五・七・七の三十一文字で、恋する女の気持ちを表わした『サラダ記念日』や『チョコレート革命』（一九九七）がベストセラーになったり、五・七・五・七・七などの定型なんてお年寄りのものだと顧みなかった若者の間に、短歌を作るブームが起こったりすること。今や、日本では俳句五〇〇万人、短歌一〇〇万人といわれています。それに連歌や川柳まで合わせると、大変な数です。一千数百年も前に成立した定型詩に惹かれる人が、これほどまでに多いこと、その理由は何でしょう。

五・七・五、または五・七・五・七・七の定型にこだわる日本人。日本と同じく音数律による定型詩をもっていて、俳句は五・七・五と知っていながらも、五・七・五の定型になっていない韓国語訳の俳句に全然抵抗感を示さない韓国の読者。今日はこの相違に注目しながら話を進めていきたいと思います。

二　音数律のよみ方―日本の伝統詩歌と韓国の時調（シジョ）

（1）泣いている我に驚く我もいて恋は静かに終わろうとする　　俵万智

（2）野ざらしを心に風のしむ身哉（みかな）　　芭蕉

まず、これらの作品を見てみましょうか。（1）の俵万智の短歌を普通に意味に沿って読めば、「泣いている我に驚く我もいて／恋は静かに終わろうとする」、あるいは、「泣いている我に／驚く我もいて／／恋は静かに／終わろうとする」となるでしょう。恋に落ちて悩んだ末に、恋の終わりを前にしている女性が愚痴をこぼしているようで、あまり詩的だとは思えません。しかし、これが短歌だと言われると、五・七・五・七・七の音数律を適用して、「泣いている／我に驚く／我もいて／／恋は静かに／終わろう

とする」と読んでみます。すると、この「／」で表示しているところに休止が生じ、その休止の合間から、恋する若い娘の躊躇いとため息のようなものが感じられてきます。特にこの短歌の上の句、「泣いている我に驚く我もいて」は絶妙です。これを音数律にあわせて「泣いている／我に驚く／我もいて」とよんでみると、「泣いている」行動の前に、「泣いている我」とその「泣いている我」に「驚く我」が現われます。そして鏡を前にして涙しているある女性が、この短歌を読む者の目に浮んでくるわけです。このようなことばの合間からの訴えは、ことばで表現しているもの以上に読者の心に沁みてくるのではないでしょうか。五・七・五・七・七の音数律の適用、すなわち読者の律読によって、ことばで言い表してはいない、その奥の意味が生きてくるのです。

次に（2）の芭蕉の俳句「野ざらしを心に風のしむ身哉（みかな）」を見てみましょうか。この句は、芭蕉の初めての紀行文の『野ざらし紀行』の旅立ちの句です。この句も散文的に読めば、「野ざらしを心に／風のしむ身哉」となるでしょう。すると、この句の意味は、「野ざらしになることを心に覚悟して旅立っていくが、初冬の風は身にしみてくるものだ」となるでしょうか。しかし、これを五・七・五にあわせて、「野ざらしを／心に風の／しむ身哉」とよんでみます。すると、今度は「しむ」ということばが「心」と「身」にまたがって、旅立っていくにあたっての芭蕉の心の壮絶さがより深く伝わってきます。

定型詩歌にかかわる際の形式についての意識を「定型意識」といいますが、右の短歌と俳句の場合、読者の側に定型意識がないと、この短歌や俳句を詩として読みあげることはできません。また、そのようによまれないと、これは詩として成り立ちません。つまり、この短歌や俳句は、詩人が伝えたい詩の内容の上に、五・七・五・七・七、または 五・七・五という音数律が加わって、いわば読者の正しい律読によってはじめて詩として成り立つのです。現に、多くの日本人は、たとえ俳句とか短歌などにあまり詳しくない場合であっても、これは俳句、または短歌だと言われると、あらかじめ頭の中に五・七・五、あるいは五・七・五・七・七を準備するようです。いわば、読者側の方も定型意識が強いわけです。当たり前のように思われるかも知れませんが、このようなことが詩を鑑賞するにあたってほんとうに当たり前のことでしょうか。

韓国の例をみてみましょう。韓国には朝鮮時代の伝統詩歌である「時調（シジョ）」というのがありますが、これがまた日本の伝統詩歌とまったく同じく、音数律による定型詩です。これは、三・四・三・四／三・四・三・四／ 三・五・四・三の三行詩です。たとえば、韓国の人に、これは詩調だと提示しても、それを読むためにあらかじめ頭の中に三・四・三・四を準備する人は少ないでしょう。意味に沿って読んでいけばいいのです。休止とか言葉の「間」の作用は、それほど大きくありません。また、詩人がよんでいる詩

の内容も、四十三文字の中に入っています。韓国では、俳句を、短いことや音数律による定型詩であるということで、漠然と「日本の時調」とよくいわれてきましたが、それはどうでしょうか。

では、ここで時調の世界についてもう少し詳しく見てみましょう。

時調（シジョ）は、十二世紀ごろからの韓国の伝統的な定型詩でありますが、三・四・三・四／三・四・三・四／三・五・四・三の音数律を基本としています。字数から見ると、四十三文字、俳句の二・五倍になります。初章・中章・終章、それぞれ三行に分かれます。内容は、儒教的道徳・虚無的な隠遁生活の他に、男女間の愛情など、いろいろであります。近代以前までの時調は、約五〇〇〇首ほどが伝わっています。

五百年 都邑地를 匹馬로 도라드니（三・四・三・四）
山川은 依旧하되 人傑은 간데없다（三・四・三・四）
어즈버 太平年月이 꿈이런가 하노라（三・五・四・三）

五百年の松都（みやこ）を　匹馬でかえりみれば
山川は変わらずも　傑士の姿なし

あわれ太平の年月は夢かとぞ思わるる　　吉再（キルジェ）

この時調は、四〇〇年近く続いた高麗王朝（九一八～一三九二）が滅びた後、この王朝の遺臣であった吉再（キルジェ）（一三五三～一四一九）が、かつての都松都（ソンドウ）をたずねて詠んだものです。朝鮮時代の作品ですから古語で書かれていますが、ここでは読みやすくするために現代の韓国語になおしました。そして日本語訳はわたしが試みたものです。この時調は、音数律を正確に守っています。韓国語は、漢字の場合、一字一音節で読みますから、一音節に託される内容は、日本語の場合よりも更に多くなります。たとえば、「山川」は、日本語では四音節ですが、韓国語では二音節になるのです。

滅びた王朝の都を訪ねて、時代はすっかり変わってしまったのにもかかわらず、昔と変わらない山川を眺めながら悲哀感に浸っている詩人。さて、この時調の日本語訳を読んで、どこか芭蕉の俳句に思い当たるところはありませんか。そうです。「夏草や兵どもが夢の跡」ですね。これは、芭蕉が『おくのほそ道』の旅で平泉を訪ねて詠んだ俳句ですね。それを見てみましょう。

三代の栄耀（えいようい）一睡（いっすい）の中にして、大門（だいもん）の跡は一里こなたに有。秀衡（ひでひら）が跡は田野に成て、金雞山（きんけいざん）のみ形

を殘す。先、高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡　　『おくのほそ道』

前にあげた時調と芭蕉のこの俳句は、ともに杜甫の詩、「春望」がその底辺にあります。杜甫は、反乱軍によって占領されている長安をみて、この詩をよみました。

国破山河在　　国破れて山河は在り
城春草木深　　城は春にして草木深し
感時花濺心　　時に感じて花も涙を濺ぎ
恨別鳥驚心　　別れを恨みて鳥も心を驚かす　　（吉川幸次郎訳）

「国破れて山河あり、城春にして草木深し」（杜甫）、「山川は変わらずも傑士の姿なし」（吉再）、「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」（芭蕉）。これで、滅び去ったも

の、あるいは滅び去っていくものへの悲哀感をテーマにした、中国・韓国・日本、という東アジアの詩の三角形ができました。これらの詩には、「懐旧」という同じタイトルがつけられそうな気がします。

では、杜甫の「春望」を熟知していたはずの韓国と日本の詩人は、それをそれぞれ自分の詩の中でどのようによみこんでいるでしょうか。前に引用した時調をみると、韓国の詩人は、滅びた都を訪ねて、その悲哀感を淡々と述べながら、この世の中の人間の営みを、「夢」にたとえています。むなしい夢に。悲しい内容ですが、詩の流れは緩やかです。詩の中では、主に詩人が自分の考えを述べています。それでこれを読んだ読者は、あァ、この詩人は、そのように思ったんだな、やはり、そうだろうなと共感することでしょう。

一方、芭蕉は、同じ悲哀感を「夏草や兵どもが夢の跡」と、夏草の茫々としている、その風景を描くことで表現しています。特に、「夏草や」と、切れ字を使って詩の流れを切っていますね。この詩を、普通のことばでいえば、「兵どもが夢の跡の夏草よ」となるでしょう。しかし、芭蕉は「夏草」を前にもってきた上、「や」という切れ字を使って一句の流れを強く切っています。すると、この句は「夏草や」と「兵どもが夢の跡」に分かれ、その間に、休止ができます。その休止からは、言葉では表現していない、芭

蕉の「懐旧」の思いが感じられてきます。詩人は、むなしいとか何も直接には言っていない。この句をよんだ読者が、詩人によって提示されている風景、この句に描き出されている風景を自分の中に思い描くことで、むなしさを感じる。詩の中に自分の考えをよみこむ時調の世界と、ただ風景を読者の前に提示する俳句の世界の違いが感じられませんか。

また、引用の時調と俳句には、同じく「夢」ということばが使われていますが、これは、その質は違いますね。時調における夢は、この世の中についての詩人の判断、すなわち、王朝も権力も人生も夢のごとくむなしいという、むなしさのたとえとして使われています。芭蕉の俳句においての夢は、あの兵どもが命をかけて切実に見ていた夢、願望としての夢が含まれています。芭蕉の辞世の句、「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の夢と、似通っていますね。吉再（キルジェ）の時調と芭蕉の「夏草や」の句の眼目は、ともに「無常」ですが、それの表現の仕方は、このように違うのです。

わたしは、先にお話しましたように、学生たちの中でこの句が三番目に人気があったのは、無意識のうちに、これらの詩に見られるこのような類似性への認識がどこかで働いていたためかなと、思いました。この時調は、韓国の中学の教科書にのっています。わたしの場合も、芭蕉のこの句を読んだ時、やはりこの時調を思い浮かべました。特に、

「夢」などの同じ言葉が入っているせいもあったと思うのですが。

では、時調がどのように詠まれたのかについてもう少し見てみましょうか。

이런들 어떠하며 저런들 어떠하리
万寿山 드렁칡이 얼거진들 어떠하리
우리도 이같이 얼거져 百年까지 누리리라

世の中はとてもかくても　あるものぞ
万寿山の蔦葛の如く　絡み合えるも世の姿
われらもかくは手を取りて　百年までも楽しまん

李芳遠（イーバンウォン）、「何如歌」

この時調は、十三世紀後半、高麗王朝を滅ぼし朝鮮王朝（一三九二～一九一〇）を開いた李成桂（イーソンゲ）（一三三五～一四〇八）の息子、李芳遠（イーバンウォン）（一三六七～一四二二）が詠んだものです。まだ年若く、父の一番の支えとして野心満々だった彼は、当時の王朝、高麗の忠臣の鄭夢周（ジョンモンジュー）に向かってこの時調をよみました。李芳遠は、「何もそうかたくなになることはないでしょう。蔦葛が絡み合いながら繁っていくように、わたしたちもお互いに

手をとり、助け合って末長く栄えようではありませんか」と、鄭夢周を自分たちの方に来ないかと、その心をさぐっています。韓国語では、この時調の題にもなった「何如」という意味の「オトハリ」ということばの繰り返しがよく効いています。また、この時調は、簡潔なことばの構築によって表現されていながら、激しい気迫と緊張感に充ちています。これに答えて歌ったのが、次の鄭夢周の時調です。

이몸이 죽고죽어 一百番 고쳐죽어
白骨이 塵土되어 넋이라도 있고 없고
님向한 一片丹心이야 가실줄이 있으랴

この身死に死にて 百たび繰り返し死ぬとても
骸骨は塵あくたとなり 魂もまた消ぬともよし
君に捧げし一片丹心の いかでか移ろわん

鄭夢周（ジョンモンジュー）、「丹心歌」

鄭夢周（ジョンモンジュー）（一三三七～一三九二）は、李芳遠（イーバンウォン）の誘いをこの時調できっぱりと断っています。自分が正しいと思ったことへの一途な思いを貫いた鄭夢周の気高さは、以来、士（ソンビ）の

鏡として称えられてきました。この二首の時調は、同じ席で歌われたと伝えられています。最後まで高麗への忠節の志を保ちつづけていた鄭夢周は、間もなく李芳遠の指示によって暗殺されました。李芳遠は、鄭夢周をはじめとする反対派を次々と取り除いてから、父を助け、一三九二年に朝鮮王朝を開いた上、一四〇〇年には朝鮮王朝の第三代王位を継ぎました。鄭夢周が暗殺された松都（ソンド）（今の開城（ケソン））の善竹橋（ソンジュクキョウ）は、彼の死後、雨が降ると赤くそまったと伝わっています。このことからも窺えるように、鄭夢周は、当時の国民だけでなく、今でも韓国で尊敬される人物の一人です。

もうすでに傾いている王朝を滅ぼすことで体制を取った李芳遠と、「忠臣は二君に仕えず」と権力に追従しないで命をかけて自分の志操を貫いた鄭夢周。このエピソードとこの問答の時調は、小学生の時から習うので、韓国人ならほとんどの人が知っています。一九九〇年代、韓国のアイドル・グループ「ソ・テジとアイドル」が、これにちなんだ「何如歌（ハヨガ）」という歌謡曲を歌い、空前の大ヒットを記録しました。この二首の時調は、その有名度からいえば、韓国の「古池や」といえるかもしれません。

また、時調には次のようなものもあります。

頭流山両端水를 예듣고 이제보니

桃花뜬 맑은 물이 山影조차 잠겼어라
아이야 武陵이 어디메오 나는 옌가 하노라

頭流山の両端水を　今しこの目で見れば
桃花うかべる清流に　山影も沈めり
童子よ、あの桃源郷とは　ここに非ざるか

曹　植

ここでいう「頭流山」とは、韓半島の南でもっとも高く、そして美しい山で有名な智異山の異名です。この詩人は朝鮮のユートピアをそこに見つけています。

내 벗이 몇이냐하니 水石과 松竹이라
東山에 달 오르니 긔 더욱 반갑고야
두어라 이 다섯밖에 또 더하여 무엇하리

わが友の数きかれれば　水石に松竹
東山に月出づれば　なおこころ楽しむ
この五つをおきて　われ望むものなし

尹　善道、「五友歌」の序曲

済州道に流配されていく途中、しばらく立ち寄った「ポギル島」に魅了されて、そのままこの島で隠遁生活に入った尹善道（ユンソンドー）（一五八七～一六七一）が、美しい島の自然をよんだこの時調は、今でも多くの人に愛されています。

冬至달 기나긴 밤을 한 허리에 베어내어
春風 니불아래 서리서리 넣었다가
어른님 오신날 밤이여든 구비구비 펴리라

冬至の長き夜　ひとくぎり切りとって
春風あたたかい布団の中に　幾重にも畳み入れては
君の帰り来る夜　なみなみと広げ延ばさん

黄（ファン）　真伊（ジニ）

これは、恋愛詩調ですね。黄真伊（ファンジニ）（十六世紀）は、才色兼備の伎女（キセン）でした。いわば韓国の小野小町ともいえるでしょう。恋多き彼女は、恋する女の気持ち、特に一般的にはつらいはずの待つ女の気持ちを、「ソリソリ（幾重にも）」とか「クビクビ（なみなみと）」

という擬態語をいかして、非常に緩やかに、明るく歌い上げています。

今まで見てきたように、時調は、世間と人生、そして自然など、実にいろいろなことについてよまれています。すでにお気づきになったかと思うのですが、時調の場合、三・四・三・四の音数律は、それほど正確に守られておりません。大体四十五文字程度になります。このように字数が一定していないのは、時調が旋律のある音楽のリズムに合わせて歌いながら創作されたということがその要因の一つです。黄真伊は、創作にも優れた作品を残していますが、時調の歌い手としても当代を風靡したと伝えられています。

以上見てきたように、時調の場合、詩人は、自分の考えを、詩の中にそれぞれ個性的に表わしています。四十五文字にもなる字数の関係もありますが、詩の内容も言葉で表現されていて、どちらかといえば詩的発想や言葉の響きが、その詩のよしあしを左右します。また、音数律の適用とは関係なく、読者の側に詩の内容が伝わります。言葉の省略とそこから生じる余韻、特に俳句の季語などからもわかるように、詩語の伝統性を重んじる日本の伝統詩歌とは、かなり違うといえるでしょう。

三　日本人における定型の意味

日本の詩の定型は、すでに記紀歌謡にその兆しが見え、『万葉集』には五・七の反復を基本とする音数律として定着しているとされています。和歌・連歌・俳句・川柳など、日本の伝統詩歌のほぼ全部がこの音数律に基づいています。なぜ、この音数律なのかについてはいろいろな説がありますが、今までの研究成果からみると、だいたい次の三つの説にまとめられるでしょう。

1. 単語の組み合わせの音数に由来するというもの
2. 大陸の詩歌の影響によるというもの―中国の五言詩など
3. 唱える際の息の長さにもとづくというもの

そして、「五音・七音は、句に変化とまとまりをもたらし、リズムの歯切れをよくし、句を作りやすくし、そして打拍の破綻を防止する」（坂野伸彦『七五調の謎をとく』）特異的な音数といわれています。たしかにそのようなことがいえるかも知れません。しかし、ここでは、五・七の音数律の「魅力」はまずおいておいて、この音数律がいかに今

の日本人に根強いかということについてみてみましょう。

たとえば、昭和五十八年に応募された交通安全標語の七十七％が五・七・五だった（坂野伸彦）そうです。今現在、日本には俳句を作る人が五〇〇万人以上、短歌を作る人が一〇〇万人以上いるといわれるので、ひょっとしたらその多くはそういう人たちが応募したかも知れません。それにしても多いです。

しかし、一〇〇〇年も前に成立した詩の音数律がこれほどまでに続いているのは、世界的にも稀なことでしょう。中国の五言絶句や七言絶句がいまも流行っているとはあまり聞きません。また、西欧のソネットがこの時代の詩の中心だとも聞きません。韓国の時調も同じです。熱心な愛好家はいますが、やはり現代詩が中心をなしています。

日本の定型詩の力と、それを支える定型意識というのは、どうしてこれほどまでに根強いのでしょうか。日本の詩人にとって定型とはどういうものなのでしょうか。現代短歌の代表的な歌人佐佐木幸綱氏は、現代詩人の鮎川信夫氏との対談の中で次のようにいっています。

形式は決して束縛ではない。「To be or not to be, that is a question.」なんていうのは、日常生活ではとてもキザで照れ臭くていえないが、舞台の上だといえる。僕は形式のおかげで、照

れないで本当のことを自由にいえる。

（『現代詩手帖』一九七三、一〇）

佐佐木氏は、短歌の形式、すなわち五・七・五・七・七の定型を舞台にたとえています。舞台の上でないと照れてほんとうのことがいえないと。では、舞台というのはどういうものでしょう。舞台というのは、自分のことを淡々と語る場所というよりは、俳優の口を借りて、いわばフィクションを利用して真実を伝えるところだといえるでしょう。舞台の裏に自分の素顔を隠して、あるいは俳優になったつもりで他人のことのように、です。観客も、あるいは読者も、それが俳優のことそのものだとは思いません。佐佐木氏は形式がそういう役割をしてくれているのだといっています。考えてみると、この舞台説は、なにも定型詩という文芸の世界だけでなく、茶道や華道など、多くの日本伝統文化にあてはまるように思われます。

わたしは、日本の五・七・五、また五・七・五・七・七の定型形式は、佐佐木氏のいう舞台説に加えてもう一つ、共通の場を作るもっとも大事な条件の一つとしての役割をはたしていると思います。俳句は「座の文芸」とよくいわれますが、まさに、五・七・五という形式を通じて、ある詩人と他の詩人、また読者との間に共感の場を作り上げている。詩をもって自分の思いを伝えるというよりは、詩をもって相手との場を作り、そ

の場で作り上げる世界を共有することを非常に大事にする。いわばネットワーク、または社交の場ですね。そして、この社交の場のメンバーになり、そこで遊ぶためには、いくつかの基礎教養、いわばルールが必要なわけです。この中の多くの方々は、この基礎教養の項目にもうすでに思い当たるところがおありかと思いますが、いかがでしょうか。

四　日本における定型詩歌の営みの特徴

和歌の詩的営み方の一つに、歌合せがありました。また、俳句の場合は、句会があります。これは、二人あるいは多くの人が集まってやるものです。歌合せも句会も、それぞれ題が出されるのが普通です。出された題をもって詩を作る。問題は、この時、この席に参加した歌人なり俳人は、出された題がこれまでの詩の伝統の中でどのようによまれてきたかについて知り尽くしているべきだということです。ある詩人の優れた詩的想像力だけでは、いい和歌なりいい俳句だとは認めてもらえません。というのは、詩人は、あらかじめそれぞれのことばの詩的伝統とイメージについて知っていなければならないからです。

季語はそれを象徴的に表わしています。日本でいちばん有名な俳句、「古池や蛙飛び

込む水の音」の句の中の蛙は、春の蛙です。わたしは、大学時代、はじめてこの句を教科書で習ったとき、これは夏の句だと思いました。わたしには「蛙」は夏の印象がもっとも強かったのです。もう一つ不思議に思えたのは、季節を表わすすべての言葉が季語というわけではないということでした。季語は、詩人たちによまれて認められたものに限られます。だから季語は今もずっと増えつづけているわけです。わたしは京都にきてはじめて「月下美人」という花に出会いましたが、これも今や季語になっています。五月一日の「メーデー」は、大正時代になって季語となりました。

俳句を正しく理解するためには、作者に限らず読者も季語についての理解が必要ですね。このようなことは、韓国で教鞭をとっているわたしが、講義室で俳句を教える時、いつも学生からいろいろとしつこく質問される部分でもあります。韓国における学生、または俳句に興味をもっている人々は、季語の約束がどうしても制約のように感じられてしまうらしいです。

さて、季語は大体次の三つに分けることができます。

1. 春の風・夏の山などのように、ことばそのものに季節が入っているもの
2. 寒さ・暑さなどのように、ある季節と密接に結びつくもの

3．花は春・月は秋のように、ある季節といわば約束してつかうもの

蛙は、春から秋にかけていますが、蛙は春の季語として約束されているのです。季語は、またそれぞれその趣も定まっています。これらの言葉を集めたものが『歳時記』ですね。たとえば、俳句の初心者用の『歳時記』で「春雨」の項目を見てみますと、春雨は、「しっとりと暖かく降り包む春の雨である。古くから静かな情趣ある雨として詩歌に詠まれている」（『入門歳時記』角川書店）と解説されています。そして、その代表的な俳句に、蕪村の次の句などがのっています。

春雨や小磯の小貝ぬるるほど　　蕪　村

春雨も時にはザーザー降ったりしますが、俳句で読むときはそういう風には読みません。長い詩の歴史の中で鑑賞されることによって文化として定着してきたのです。俳句を作るのには、この約束ごとを真面目に覚えなければなりません。この約束ごとがわからなければ、俳句を作ることは勿論のこと、鑑賞することすらできません。これが、いわば最小限の基礎教養です。

歌合せにおいての題詠や俳句の句会に出される席題など、日本の詩的営みの中で特に

注目したいのは、これらはともに与えられた素材をもって自分の想像力をはばたかせて、詩を作るということです。自分の自由にではなく、その題がこれまでどういう風に詠まれてきたかを気にしながら、そしてそこからあまりはみ出さないようにしながら、どこかで自分らしさをさらりと出す。最初から自分の個性を主張するのではありません。非常に控えめに、けれどもどこかでさりげなく自分らしさを出す。

高浜虚子は、「俳人は詩人ではない」といいました。また、志賀直哉は、「俳人は言葉の職人」といいました。これは、言葉の伝統を受け継ぎつつ、それを刷新する人間という意味でしょう。そして、それがある詩人一人でやるのではなく、集団の中で行われるということです。そして、それを可能にするのは、俳句をはじめとして短歌や連歌が、作ることに非常に重点がおかれている文芸だということです。素材一つ一つ、ことば一つ一つ、非常に綿密な研究の上で行われることばのゲームのようなものです。また、このゲームが非常に楽しい。しかし、その楽しさはその集団の外の人までには伝わりにくい。さらに、その集団の中の人々は、自分たちの楽しさが他の人に伝わらないのを、一向に構わない。閉鎖的ですね。自分のグループの中だけを意識します。自分のグループの向うを意識しないのです。

野球をするためにはまず野球場に入らなければならないように、日本の詩、短歌や俳

句を作るには、五・七・五・七・七や五・七・五の形式の中に入る。そして、今までその五・七・五の中に読まれた言葉のイメージを十分気にしながら、そのイメージからあまり外れていない詩を作る。いわば、これまでに作られたテクストを思い起こさせ、それを捻っては、転換するのです。これらの理由が、同じ形式、五・七・五、あるいは五・七・五・七・七の形式を一〇〇〇年以上も続けさせ、いまなお日本の代表的な詩の形式でありつづけることができるようにしているのではないでしょうか。

五　俳句の韓国語訳

つい最近、今年（二〇〇〇年）の三月、韓国で『한 줄도 너무 길다（一行も長過ぎる）』（イレ出版社、ソウル）という俳句の韓国語訳が出版されましたが、これがこの二ヶ月で二万部も売れたそうです。これを訳した人は、韓国でもっとも人気のある現代詩人の一人、柳シファという人です。本がこれほどまでに売れたのは、もちろんこの詩人の人気のお蔭でもありますが、わたしは、このことは、詩を読む、すなわち詩を鑑賞する国と、詩を作る国との違いによると思います。

詩を読む国と詩を詠む国。韓国での話ですが、ある時、わたしが日本の俳句人口は五

〇〇万人以上もいるといったら、では俳句詩人はお金持ちですねといわれてびっくりしたことがあります。その人は五〇〇万人は俳句読者だと思ったんですね。だから、句集がたくさん売れて印税が入るだろうと。わたしが、いいえ、その五〇〇万人は俳句を作るひとですといったら、向うはなおのことびっくりしていました。日本で俵万智の『サラダ記念日』は例外中の例外ですが、韓国で現代詩集が数十万部売れることは、今でも度々あることです。

というのは、両国における詩のあり方が異なるわけです。韓国における詩は、詩人が詩をもって自分のメッセージを伝えるものといえるでしょう。特に、近代における詩は、それぞれの時期ごとに社会改革の先頭に立っていました。いわば、詩人は時代の先を読み、それを発信する役割をしていたのです。多くの民衆は、詩人の呼びかけに答え、集まったりしました。そのため、韓国で詩人は、非常に尊敬されてきたのです。

わたしは、俳句の翻訳の本が二万部も売れたと聞いて、いろいろなことを考えさせられました。まずは時代が変わったということ、そして多くの韓国の人が日本文化の本質に目をむけ始めたということです。それに、俳句の韓国語訳の多様化もあげられるでしょう。

この本のタイトル、『一行も長過ぎる』は、俳句が日本語で一行で書かれていること

を指していますね。韓国でも、「俳句は世界で一番短い詩」として知られています。

一九八二年、李御寧氏は、『縮み志向の日本人』（キリンウォン、ソウル）という本の中で、俳句についていろいろと書いていました。皆さんの中でも日本語版（学生社、東京、一九八二）でお読みになった方もいらっしゃるかと思いますが、彼の俳句についての解説は非常に面白かった。解説に引かれつつ読み進んでいくと、いざ引用されている俳句の韓国語訳は、あの面白い解説とはあまりにもかけ離れたものでした。彼は、俳句を一行で訳していました。ほとんど直訳です。これを詩と言えるかどうか。当時、私は大学生になったばかりでしたが、いまでもその時の戸惑いを忘れていません。

以後、韓国の研究者の中では、俳句は翻訳不可能という方向に、ますます傾いていったのではないかと思われます。日本語に詳しくて俳句に詳しい人ほど、その確信は強かったのではないでしょうか。

そもそも俳句は一七字の詩ですが、一七の文字をもって表わすことばだけの世界ではありませんね。その一七の文字の奥、そしてそのことばとことばの合間に、ことばでは表わされていない、どうしてもことばには還元させにくい世界が広がっているわけです。一七文字だけを訳すか、文字の奥の、ことばの間から伝わってくるものまで訳すか。韓国では、いままで、俳句は韓国語でも五・七・五の音数律であるべきだということ、そ

してこの五・七・五の文字だけにこだわりすぎたのではないかと思います。

現に、わたしもその一人です。『おくのほそ道』の韓国語訳をするにあたって、いちばん悩んだ部分でもあります。わたしは、俳句を三行に訳しました。多くの英訳が三行であることも参考にしましたが、俳句の言葉の詩的空間といえる「間」と切れ字を生かすためには、行を変えることが効果的であること、そして韓国の時調が三行詩であることを考えました。そして俳句の韓国語訳の詩が、韓国語の詩としても、その解説以上に詩的共感を与えることを、願ってのことでした。しかし、韓国語で美しい詩にしたいと思うと、どうしても自分の解釈が入っていくものです。どこかで歯止めをかけないと、芭蕉の俳句を素材にしたわたしの詩になりがちでした。

吉川幸次郎氏は、次のようにいっています。

> 翻訳とは、異なる二つの民族の言語という矛盾した存在の中に、統一した方向を見つけ出そうとする努力であります。〈中略〉原文よりも、より以上の明晰度を、またより以上の文学性を、注入しようとする意識は、文士の翻訳としてはともかく、学人の翻訳としては、殊に抑えらるべきでありましょう。それは真実の掩蔽であり、学人としては、莫大の罪だからであります。拙訳「尚書正義」第三冊の序に「私が最も腐心したのは、正義原文の曖昧なところを、むりに明晰にせぬこと

であった。私は明晰な国語を捜すよりも、むしろ不明晰な国語を捜すのに、苦労した」といっているのは、そこのところであります。

大山定一・吉川幸次郎『洛中書問』

わたしは、芭蕉の俳句を訳しながら、時々この文章を思い浮かべて、自分が詩人ではなく研究者であることを、自分に言い聞かせていました。できれば、五・七・五を生かし、切れ字も生かしながら、訳したのです。なのに、『おくのほそ道』の韓国語訳を読んだ韓国の読者は、五・七・五なんて全然気にしていない。韓国風に読むわけです。多くの時調が、音数律に合わなくても、それが時調のよしあしにあまり影響しないのと同じく、音数律にはあまりこだわらないで韓国語訳の俳句を鑑賞するわけです。

わたしは、この五・七・五の訳し方が気になって、『一行も長過ぎる』という本を、さっそく取り寄せて読んでみました。ここでも俳句は三行。しかし、五・七・五の音数律からは、完全に自由。『一行も長過ぎる』といいながら三行に訳しているのは、おもしろいですね。韓国の俳句は、これから三行詩に定着するでしょう。彼は、また詩人の感性を生かし、一七文字の間と奥のものを十分補足し、韓国の三行の現代詩にしていました。五・七・五の俳句の面影は、「HAIKU」ということば以外は、どこにも残ってい

ないような感じです。この本を読んだ多くの人は、五・七・五などよりは、俳句は短い三行詩で、発想の面白い詩だと思うことでしょう。

では、ここで俳句の韓国語訳の実際をいくつか見てみることにしましょう。「古池や蛙飛び込む水の音」は、次のようにそれぞれ訳されています。

해묵은 연못이여 개구리 뛰어드는 물소리로다（七・七・五）李御寧訳
（古池や蛙飛び込む水の音）

해묵은 연못이여（七）　古池や
개구리 뛰어드는（七）　蛙飛び込む
물 소리（三）　水の音　拙訳

오래된 연못（五）　古池や
개구리（三）　蛙
풍덩！（三）　ポチャン！　柳シファ訳

この句の韓国語訳は三つとも五・七・五になっていないですね。この三つの訳の中で、

韓国の読者にもっともわかりやすく、イメージとして思い浮かべられやすいのは、柳シファ訳の、「古池や／蛙／ポチャン！」かも知れません。これは三つの訳の中で、本来この句の眼目である「静寂」とはもっとも距離がありますが、読者にはおもしろく受け入れられるでしょう。

最近、韓国では俳句についての興味が高まりつつあります。これからは、いろいろな人による俳句の韓国語訳や俳句についての研究がなされることになるでしょう。

ちなみに、わたしの訳した『おくのほそ道』の韓国語訳は三〇〇〇部ほど売れました。当時、この本に対する反響も多くの人を驚かせたのですが、このようなことは、詩を「読む」韓国の詩の享受の伝統と深くかかわりを持っていることでしょう。そして、今まで韓国にはあまり知られていない日本の精神文化への興味のあらわれだとも言えると思います。今、日本文化を正しく理解しようとする人々が、かつて大衆が時代の先をよんでいた詩人の発するメッセージに耳を傾けたように、波寄せてくる日本文化の深層、その流れの先の読みを、日本の詩を訳した現代詩人に、そして日本研究者に、またはそういった俳句そのものの中に求めているのかも知れません。

しかし、韓国で一番大きい辞書に、残念ながら俳句の項目はありません。また、最近出た『広辞苑』の第四版（一九九一）に、時調の項目が見当たりません。おあいこ、で

すね。このことは、韓国と日本の文化交流の現在と、これからの課題を何より鮮明に語っている部分だと思います。わたしは、これからこのようなことを念頭に置きながら、俳句をはじめとした日本伝統詩歌の研究と翻訳を続けることで、日本と韓国の文化交流に役立ちたいと思っています。

長い時間、ご清聴、ありがとうございました。

参考文献

・松尾芭蕉『おくのほそ道』（『校本芭蕉全集』第六巻、富士見書房、一九八九）
・大山定一・吉川幸次郎『洛中書問』秋田屋、一九四六
・吉川幸次郎『新唐詩選』（『吉川幸次郎全集』十一、筑摩書房、一九七四）
・俳句文学館編『入門歳時記』角川書店、一九八四
・俵万智『サラダ記念日』河出書房、一九八七
・俵万智『チョコレート革命』河出書房、一九九七
・坂野伸彦『七五調の謎をとく』大修館書店、一九九六
・鮎川信夫・佐佐木幸綱対談「規制と非定型」（『現代詩手帖』一九七三、一〇）
・光田和伸「定型の成立―万葉集論の礎として」（『文学』一九九九、秋）

・李御寧『축소지향의 일본인』キリンウォン、ソウル、一九八二
・沈載完編『定本時調大全』一潮閣、ソウル、一九八四
・拙訳『바쇼의 하이쿠 기행 Ⅰ―오쿠로 가는 작은 길』バダ出版社、ソウル、一九九八
・柳シファ訳『한 줄도 너무 길다』イレ出版社、ソウル、二〇〇〇

発表を終えて

もともとは日本の近代詩について勉強していたわたしが、『おくのほそ道』に興味をもったのは、「奥」の仙台に留学してからのことであった。そして今度は京都周辺の芭蕉の跡を訪ね歩くことになった。奥から見る京、京から見る奥。一九九九年の真夏、わたしはその違いについて確かめたい気持ちでときめきながら日文研での生活を始めた。

ところが、その確かめ方は違うところからやってきた。連歌との出会いである。光田和伸先生から連歌会の話を聞いて、連歌はどのような席でどのように詠まれるものか「見物」に行ったのが、いつの間にか自分もなんとか一句を詠んでみる気になっていたのである

一座の連中は自らの経験や観察を五・七・五なり七・七の形式でよむ。告白的によんでいるように見えるが、ほんとうの告白とはまた違う。人々はこの遊びの中で自分をチョコチョコ出しながら心のコミュニケーションをしていた。ことばの伝統といくつかの約束ごとを忘れない優雅な遊び。それに夢中になる人々。定型という形式の上で「連」になることの喜びに浸っている連中の姿は、朗らかで美しかった。

この発表は、このような連歌の世界を垣間見たことから触発されたものである。日本人にとって五・七・五、または五・七・五・七・七という定型はいったい何であろうか。韓国の定型詩の世界とはどうちがうのであろうか。韓日の定型詩のありかたの違いについて詮索を試みることで、両国の心の文化・ことばの文化の奥が見えてくるのではないであろうか。今度の発表はこのような根本的なことへの問いかけの始まりにすぎず、それへの答はこれからの私の課題にしたい。

この発表をはじめとして日文研での一年間、多くの方々にお世話になった。まずは「連」の重要性など日本文化へと目を向けさせてくださった小松和彦先生、発表にあたって貴重なアドバイスとコメンテーターを引き受けてくださった光田和伸先生にお礼を申し上げたい。さらに当日会場まで足を運ばれた渡邉雅子先生と京都連歌会の方々、篠原初江専門官、変体仮名へ道を開いてくださった早川聞多先生、研究をふくめわたしの京都体験をより豊かにしてくださった稲賀繁美先生、劉建輝先生、Timothy. D. KERN先生外、日文研の皆様に感謝の念をあらわしたい。

金貞禮

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ Alessandro VALOTA（ピサ大学助教授） 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	エンゲルベルト・ヨリッセン Engelbert JORIβEN（日文研客員助教授） 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー　A.トンプソン Lee A. THOMPSON（大阪大学助手） 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19	フォスコ・マライーニ Fosco MARAINI（日文研客員教授） 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14	SONG　Whi Chil 宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9	セップ・リンハルト Sepp LINHART（ウィーン大学教授） 「近世後期日本の遊び―拳を中心に―」
⑦	63.10.11	スーザン J. ネイピア Susan J. NAPIER（テキサス大学助教授） 「近代日本小説における女性像―現実と幻想」
⑧	63.12.13	ジェームズ C. ドビンズ James C. DOBBINS（オベリン大学助教授） 「仏教に生きた中世の女性―恵信尼の書簡」
⑨	元. 2.14 (1989)	YAN　An Sheng 厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11	LIU　Jingwen 劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9	スザンヌ・ゲイ Suzanne GAY（オベリン大学助教授） 「中世京都における土倉酒屋―都市社会の自由とその限界―」
⑫	元. 6.13	HSIA　Gang 夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） 「インタビュー・ノンフィクションの可能性―猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに―」

⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント Ernst LOKOWANDT（東洋大学助教授） 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8	キム・レーホ KIM Rekho（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12	ハルトムート O. ローターモンド Hartmut O. ROTERMUND（フランス国立高等研究院教授） 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3	WANG Xiang-rong 汪　向榮（中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14	ジェフリー・ブロードベント Jeffrey BROADBENT（ミネソタ大学助教授） 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12	エリック・セズレ Eric SEIZELET（フランス国立科学研究所助教授） 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ Sumie JONES（インディアナ大学準教授） 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13	カール・ベッカー Carl BECKER（筑波大学哲学思想学系外国人教師） 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10	グラント K. グッドマン Grant K. GOODMAN（カンザス大学教授・日文研客員教授） 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8	イアン・ヒデオ・リービ Ian Hideo LEVY （スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12	リヴィア・モネ Livia MONNET（ミネソタ州立大学助教授） 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2. 7.10	LI Guodong 李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉕	2. 9.11	MA Xing-guo 馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） 「正月の風俗—中国と日本」
㉖	2.10. 9	ケネス・クラフト Kenneth KRAFT（リーハイ大学助教授） 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ Ahmed M. FATTHY（カイロ大学講師） 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
㉘	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ Karel FIALA（カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
㉙	3. 2.12	アレクサンドル A. ドーリン Aleksandr A. DOLIN （ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5	ウイーベ P. カウテルト Wybe P. KUITERT（ワーゲニンゲン大学研究員） 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
㉛	3. 4. 9	ミコワイ・メラノビッチ Mikołaj MELANOWICZ （ワルシャワ大学教授・日文研客員教授） 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー Beatrice M. BODART-BAILEY （オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授） 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
㉝	3. 6.11	サトヤ B. ワルマ Satya B. VERMA （ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授） 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9	ユルゲン・ベルント Jürgen BERNDT（フンボルト大学教授・日文研客員教授） 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」
㉟	3. 9.10	ドナルド M. シーキンス Donald M. SEEKINS（琉球大学助教授） 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
㊱	3.10. 8	WANG Xiao Ping 王　曉平（天津師範大学助教授・日文研客員助教授） 「中国詩歌における日本人のイメージ」
㊲	3.11.12	SHIN Yong-tae 辛　容泰（東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員） 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」

㊳	3.12.10 (1991)	HONG YoonSik 洪　潤植（東国大学校教授） 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
㊴	4. 1.14 (1992)	サヴィトリ・ヴィシュワナタン Savitri VISHWANATHAN（デリー大学教授・日文研客員教授） 「インドは日本から遠い国か？—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10	ジャン＝ジャック・オリガス Jean-Jacques ORIGAS（フランス国立東洋言語文化研究所教授） 「正岡子規と明治の随筆」
㊶	4. 4.14	リブシェ・ボハーチコヴァー Libuše BOHAČKOVÁ （プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授） 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12	ポール・マッカーシー Paul McCARTHY（駿河台大学教授） 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」
43	4. 6. 9	G．カメロン・ハーストⅢ G. Cameron HURST Ⅲ（ニューヨーク市立大学リーマン広島 校学長・カンザス大学東アジア研究所長） 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14	Yoshio SUGIMOTO 杉本　良夫（ラトローブ大学教授） 「オーストラリアから見た日本社会」
㊺	4. 9. 8	WANG Yong 王　勇 （杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授） 「中国における聖徳太子」
㊻	4.10.13	LEE Young Gu 李　栄九（大韓民国中央大学教授・日文研客員教授） 「直観と芭蕉の俳句」
㊼	4.11.10	ウィリアム D．ジョンストン William D. JOHNSTON （ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授） 「日本疾病史考—『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
㊽	4.12. 8	マノジュ L．シュレスタ Manoj L. SHRESTHA（甲南大学経営学部講師） 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐって—」

㊾	5. 1.12 (1993)	PARK Jung-Wei 朴　正義（圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員） 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9	マーティン・コルカット Martin COLLCUTT （プリンストン大学教授・日文研客員教授） 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」
㊿	5. 3. 9	Yoshiaki SHIMIZU 清水　義明（プリンストン大学マーカンド栄誉教授） 「チャールズ L. フリアー（1854～1919）とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
52	5. 4.13	KIM Choon Mie 金　春美（高麗大学校教授・日文研来訪研究員） 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11	タキエ・スギヤマ・リブラ Takie SUGIYAMA LEBRA（ハワイ大学教授） 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8	H. W. KANG 姜　希雄（ハワイ大学教授・日文研客員教授） 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 —科挙制度をめぐって—」
55	5. 7.13	ツベタナ・クリステワ Tzvetana KRISTEVA（ソフィア大学教授・日文研客員教授） 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
56	5. 9.14	KIM Yong-Woon 金　容雲（漢陽大学教授・日文研客員教授） 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
57	5.10.12	オロフ G. リディン Olof G. LIDIN（コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授） 「徳川時代思想における荻生徂徠」
58	5.11. 9	マヤ・ミルシンスキー Maja MILCĬNSKI （スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授） 「無常観の東西比較」
59	5.12.14	ウィリー・ヴァンドゥワラ Willy VANDEWALLE （ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授） 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン J. Martin HOLMAN（ミシガン州立大学連合日本センター所長） 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」

61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモア Maya GERASIMOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8	オギュスタン・ベルク Augustin BERQUE (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12	リチャード・トランス Richard TORRANCE (オハイオ州立大学助教授) 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880〜1930」
64	6. 5.10	シルバーノ D. マヒウォ Sylvano D. MAHIWO (フィリピン大学アジアセンター準教授) 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14	LIU Jian Hui 劉　建輝 (南開大学副教授・日文研客員助教授) 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12	チャールズ J. クイン Charles J. QUINN (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」
67	6. 9.13	フランソワ・マセ François MACÉ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥⑧	6.11.15	JIA Hui-xuan 賈　蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20	PENG Fei 彭　飛 (日本学術振興会特別研究員) 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦⓪	7. 1.10 (1995)	ミハイル V. ウスペンスキー Michail V. USPENSKY (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心に—」
⑦①	7. 2.14	YAN Shao Dang 厳　紹璗(北京大学教授・日文研客員教授) 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのかかわり—」

⑫	7. 3.14 (1995)	WANG Jiahua 王　家驊（南開大学教授・日文研客員教授） 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑬	7. 4.11	アリソン・トキタ Alison TOKITA （モナシュ大学助教授・日文研客員助教授） 「日本伝統音楽における語り物の系譜―旋律型を中心に―」
⑭	7. 5. 9	リュドミーラ・エルマコーワ Lioudmila ERMAKOVA （ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長） 「和歌の起源―神話と歴史―」
75	7. 6. 6	パトリシア・フィスター Patricia FISTER（日文研客員助教授） 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25	CHOI Kil-Sung 崔　吉城（広島大学総合科学部教授） 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑰	7. 9.26	SU Dechang 蘇　徳昌（奈良大学教養部教授） 「日中の敬語表現」
⑱	7.10.17	LI Jun Yang 李　均洋（西北大学副教授・日文研来訪研究員） 「雷神思想の源流と展開―日・中比較文化考―」
79	7.11.28	ウィリアム・サモニデス William SAMONIDES （カンザス大学助教授・日文研客員助教授） 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑳	7.12.19	タチヤーナL.ソコロワ=デリューシナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA （翻訳家・日文研来訪研究員） 「俳句の国際性―西欧の俳句についての一考察―」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク John CLARK（シドニー大学助教授・日文研客員助教授） 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」
㉒	8. 2.13	ジェイ・ルービン Jay RUBIN（ハーバード大学教授・日文研客員教授） 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12	イザベル・シャリエ Isabelle CHARRIER（神戸大学国際文化学部外国人教師） 「日本近代美術史の成立―近代批評における新語―」

⑧④	8. 4.16 (1996)	リース・モートン Leith MORTON (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧⑤	8. 5.28	マーク・コウディ・ポールトン Mark Cody POULTON (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) 「能における『草木成仏』の意味」
⑧⑥	8. 6.11	フランシスコ・ハビエル・タブレロ Francisco Javier TABLERO (慶應義塾大学訪問講師) 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30	シルヴァン・ギニヤール Silvain GUIGNARD (大阪学院大学助教授) 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10	ハーバート E. プルチョウ Herbert E. PLUTSCHOW (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) 「怨霊の領域」
⑧⑨	8.10. 1	WANG Xiu-wen 王　秀文 (東北民族学院助教授・日文研客員助教授) 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」
90	8.11.26	WANG Bao Ping 王　宝平 (杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授) 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨①	8.12.17	CHEN Shen Bao 陳　生保 (上海外国語大学教授・日文研客員教授) 「中国語の中の日本語」
⑨②	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員) 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18	KWAK Young-Cheol 郭　永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) 「言語から見た日本」
⑨④	9. 3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL (スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) 「弁当と日本文化」

⑮	9. 4.15 (1997)	ミケーレ F. マルラ Michele F. MARRA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授） 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
⑯	9. 5.13	デニス・ヒロタ Dennis HIROTA（京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家　バークレー仏教研究所準教授） 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑰	9. 6.10	ヤン・シコラ Jan　SÝKORA （チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授） 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」
98	9. 7. 8	Kinya　TSURUTA 鶴田　欣也 （ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） 「向こう側の文学—近代からの再生—」
⑲	9. 9. 9	ポーリン・ケント Pauline KENT（龍谷大学助教授） 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14	セオドア・ウィリアム・グーセン Theodore William GOOSSEN （ヨーク大学準教授・日文研客員助教授） 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
㉑	9.11.11	KIM　Uchang 金　禹昌（高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授） リヴィア・モネ Livia MONNET （モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） カール・モスク Carl MOSK（ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授） ヤン・シコラ Jan SYKORA（カレル大学助教授・日文研客員助教授） Kinya　TSURUTA 鶴田　欣也 （ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ（龍谷大学助教授） 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG　Shin-pyo 姜　信杓 （仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授） 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑭	10. 2.10 (1998)	GAO Wenhan 高　文漢（山東大学教授・日文研客員教授） 「中世禅林の異端者――休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン・カイザー Stefan KAISER（筑波大学教授） 「和魂漢才、和魂洋才―語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES （インディアナ大学教授・日文研客員教授） 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET （モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） 「映画と文学の間に―金井美恵子の小説における映画的身体」
⑱	10. 6. 9	Hiroshi SHIMAZAKI 島崎　博（レスブリッジ大学教授・日文研客員教授） 「化粧の文化地理」
⑲	10. 7.14	Peipei QIU 丘　培培（バッサー大学助教授・日文研来訪研究員） 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ―詩的イメージとしての典故―」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER（チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授） 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA （カイロ大学講師・日文研客員助教授） 「『愛玩』―安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10	アリソン・　トキタ Alison McQUEEN-TOKITA （モナシュ大学助教授・日文研客員助教授） 「『道行き』と日本文化―芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK （シェフィールド大学教授・東京大学客員教授） 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑭	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜　勤 （華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第２学部副学部長・日文研客員助教授） 「『中』のシンボリズムについて―宇宙論からのアプローチ」

115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑯	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑰	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑱	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金　知見（韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑳	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子　滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
㉑	11. 9. 7	SONG Min 宋　敏（韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12	ジャン-ノエル・A. ロベール Jean-Noel A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
㉓	11.11.16	ヴラディスラブ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリャード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
㉔	11.12.14	X. Jie YANG 楊　暁捷（カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA（日文研中核的研究機関研究員） 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑥	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李　応寿（世宗大学校副教授・日文研客員助教授） 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレーンハルト Anna Maria THRÄNHARDT （デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授） 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN （ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授） 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金　貞禮（国立全南大学校副教授・日文研客員助教授） 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⓪	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD （県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授） 「出島—長崎—日本—世界　憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン（1867—1944）と倉場富三郎（1871—1945）」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH （ソフィア大学助教授・日文研客員助教授） 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬②	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI（日文研外来研究員） 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER （インディアナ大学教授・日文研客員教授） 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬④	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛　容泰 （東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授） 「日本語の『カゲ（光・蔭）』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡　敦達 （同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授） 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」

136	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS（日文研中核的研究機関研究員） 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER （ヴァージニア大学教授・日文研客員教授） 「仏教の戒律とは何か？」
㊳	13. 4.10	LI Zhuo 李　卓（南開大学教授・日文研客員教授） 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
㊴	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY （フランクフルト大学教授・日文研客員教授） 「西洋における俳句の新しい受容へ」
140	13. 6.12	XU Subin 徐　蘇斌（日文研外国人研究員） 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II （コロンビア大学教授　日文研外国人研究員） 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
142	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE（日文研外来研究員） 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN （ハワイ大学準教授・日文研客員助教授） 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官　文娜（日文研外国人研究員） 「日本社会における「近親婚」と中国の「同姓不婚」との比較」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm

＊＊＊＊＊＊＊
発 行 日　2001年12月25日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp
＊＊＊＊＊＊＊
© 2001　国際日本文化研究センター

■ 日時

2000年5月9日（火）

午後2時～4時

■ 会場

国際交流基金　京都支部

第二九回　五・七・五、日本と韓国

金　貞　禮

国際日本文化研究センター